

遠近新聞
第十七號

定價一匁



西垣文庫
文庫 10
7265
15



特文庫10
7265
15



遠近新聞第十七号

慶應四年五月十四日

貧食家飲食の爲めは落命せし漸

日本草双紙下りの書より抄記す

凡そりたしりけるもの孰も飲食の慾あらん
されど人うるものハ能く此慾を抑也是も万物の靈
なる所以あり爰は千八百三十四年の頃和蘭安特堤
のわさるるは狡猾無二の惡棍ありなり此者性と
してのちささるる飲食とりの人ハ百事も忘るる事
りありしが其近きとるりは一軒の料理屋ありなり

三十一日

第十七号

八十五



5726

旧来の名家と繁昌言ふべうもさく酒肉羨婦あど
 山の如くあり乃ち彼悪棍其家の勢と酒肉の
 沢山なる心迷ひ遂に其家を横領せんと心をち
 よらぐたたり其後のいぢどもさく料理屋の主人世
 を去りて其子のいぢども何事も言ひがひあがり
 乃れが悪棍得たりとよらみよつせるといぢき子を逐
 ひ出し宿志を遂げしぞいとみく乃れさくも悪棍の
 性なすのしと飲と食ひ遂に病を引出し頓て非命な
 死し乃れが人皆天の罰ありとて恐むぬものみんか
 かりける元を悪報は速速あり是等なりとも早しと

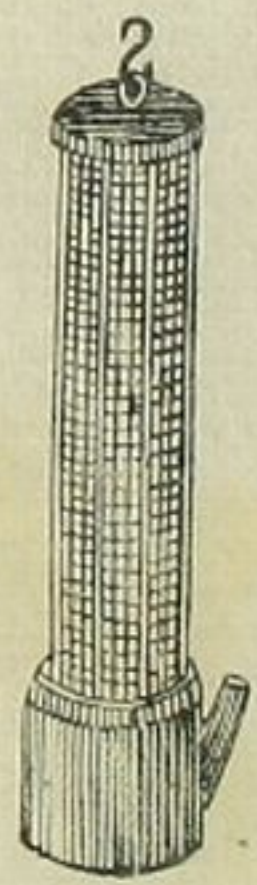
云ふべし嗚呼慎むとも慎むべしもの飲食の慾よ
 こそ
 理外無物樓主人記

○ダヒーの避難燈の事

化学書より抄出して十四号の参考は備ふ
 ダヒーの避難燈とりハ棚燈ハ圖の如く鉄の張金よ
 て周囲を纏ひ上部ハ閉塞しつるものあり扱所謂爆
 發氣ハ礦夫の携ふる燈火と礦氣と觸れ合ひ以て發
 するものあり故に此棚燈を用ふと假令礦氣棚燈
 の内部よ入て燃ゆると何りとも鉄ハ冷みるものか
 らんが炎カハ外部よ出づるを防ぐ依て爆發氣の患

あり然し礦氣ある所は久しく留まれば鉄の張金次第は熾灼し終は爆發するに至る故は礦氣あることを知ると速は其所を退くべし

タヒ一の避難燈の圖



近頃ハ日本の人も石炭の功能を知ると之を掘出は事漸々多し然れども未だ此避難燈の設有るや否と知らず若し忽は燈火を用ゆると死ハ其火忽ち礦氣は移りて爆發し恰も合藥の發するが如く

礦夫の斃る事心然あり豈恐とざるべけんや嗚呼避難燈の用重大と云ふべし故に今爰之を記して以て礦夫の大難を妨ぐと云爾

辻 理之介 訳

仙臺にて官軍の參謀五人を斬りし事又一七人共りし其事の起りハ最初東國の十五藩連名にて會津庄内の事ハ舟總督府へ建言せし事ハれども參謀等是ハ御取上げに相成らざると返却し及べり其後ハ再三の建言皆如此なる由其間ハ何ら疑き事有りと

見へ東国人等手寄りて求め直る九條殿下は面謁
して之を伺ひし殿下其事の嘗て知らざりしを驚き
且怒りしを以て於是東国人等是れを以て所置
の悉く参謀等が専恣のゆづる事ありしを知ら殿下
乞ふを云く殿下も嘗て知るし召しよるを以て其殿
御墨附を受けしと願ひしる殿下即ち之を與
へ賜ひしるを以て東人夫より参謀等の所に至り鞠向
及び一々中訳立ざりし故に明らる罪を鳴ら
して斬戮し及ひしり又右は舟官軍の動揺大方
らざりしが東国の兵九條殿下の命を奉り或の征討

一或の鎮撫せらるしあれどもゆきごと全く平安に至
らざると見へしり案考する風説よりいふに
らるは只右咄の稍順序あるが如く覚ゆる之を録
看官亦姑く疑ひを存して可也

○福島より来状の由

閏四月十八日白川由誥合仙臺炭山人数より同所市
中へ老人子供早々立退け振出觸渡し夫より山人数
由引揚よお成の後十九日曉方會津勢押寄来り追
ふ在城二本松棚倉相馬岩城勢城は火を掛け一戦
も不及退退町家少々類焼同所お治り會津勢入替

りよお成市中へ市米金等分下り然る処醍醐様官軍
由召連郡山辺を由着の処白川大變由聞及直様姿
を替へ福島を由歸り川船を仙臺へ由引取相
成由其後如何の次第は座の哉仙臺候俄に軍
征伐の音追々由人數昼夜共大急ぎよて白川へ由操
出よお成由九條様由差圖の由よて由附添の
■五百四十三人大半討取福島よても廿三人討取
由軍の見當り次第討取の由音由差圖の由備又今
般一条の全く■の取計より支起りの由振明白よ
お分由依之奥羽一致よお成り■軍征伐よ追々由

登りよお成由九條殿の仙臺に岩沼城に滞留
醍醐様沢三位様の如何よ相成よ風聞廿五日白
川白坂の間合戦勝敗の暇と不お分廿八日奥羽大名
不殘仙臺へ出張大評定有之由■へ標ト合せ不
遠内旗上いよ白川口より江戸表よの■軍討七
し管根迄登り同所云々

○ 下野太田原落城のよ真偽不詳

○ 當月九日十日頃銃隊を始めよて遊撃隊並よ別手

組の者芝増上寺内へ集り屯るせし由

○
去る九日柳原通りと通行せし芝辺の者のより夫
婦連を新橋通りよりぬれぬ救米を請取り夫の米を
持ち先を行き妻の三女の小児を脊負ひ行きしが新
橋欄干より倚り脊負ひ替んとせしと過て其児を水中
に落せり當日大水の事なれば道路の人も之を救ふ
と能く母の狂氣の体にて夫の跡を追て去る鳴
呼可憐の至り又心を用ひざるの甚しきなり

丸山作哉藏